

羅什訳『法華経』の 語学的研究

—接続詞「而」について—

椿 正 美

0 はじめに

『法華経』の文中に用いられている様々な表現をより深く理解するためには、従来の訓読法のみには徹することなく、時には漢語古典文法を利用する必要性も認めなければならない。そこで前稿では立場を語学的研究に限定し、鳩摩羅什訳『法華経』文中に用いられた指示詞の機能について探った。その結果、対象物との距離が近い場合でも厳密に見れば各指示詞に含まれた機能は微妙に異なる点が発見された。

本稿では引き続き羅什訳『法華経』を調査対象に選び、前稿で用いた調査方法を利用して接続詞「而」の機能について探った。

1 調査の方法

まず接続詞全体に於ける「而」の位置について明確にしなければならない。

牛島1967は〈連詞〉（ここでは接続詞を〈連詞〉と表現）を〈構成連詞〉〈関係連詞〉に分類し、〈関係連詞〉の使用に「中間に介在する場合」と「冒頭に前置する場合」があることを指摘している。更に前者に含まれる機能を〈接続関係〉と〈条件関係〉に分け、〈接続関係〉を構成する〈連詞〉の例として「且」「及」「而」を挙げている。

接続詞の前部と後部の関係については、周法高1961がこれを〈連結〉と呼称して7種類の形式を記し、その中の「二つの並列成分の連結」「副語と述語の連結」に用いられる種類の例として「而」を挙げている。但し、接続詞「而」の使用形式は単独使用されるものだけでなく、他の成分との連動によって表現される場合もあり、これについては同論文で「以・・・而・・・」「為・・・而・・・」等の形式が紹介されている。

本論では『法華経』本文中から各用法について接続詞「而」を単独使用した場合と他の成分との連動によって表現される場合の例文を挙げ、それぞれの機能について探っていく¹⁾。

2 並列

朱徳熙1982は接続詞「而」に述語性並列成分の連結機能が具えられていることを指摘し、楊伯峻1981は述語となり得る語の中で「而」による連結が可能な表現に「二つの動作」「二つの形容詞」を挙げている。本章では形容詞句によって状態を表す場合と動詞句によって行為を表す場合に於ける「而」の機能について述べる。

2.1. 形容詞句の連結

呂叔湘1942は「連合関係にある形容詞の連結には関係詞が必要である」と述べ、関係詞に含まれる語彙として「而」を紹介している。形容詞句によって表された並列成分の連結例を次に挙げる。

- (1) 示人百歳子、髮白而面皴。(從地涌出品)
- (2) 若有深心者、清淨而質直。(分別功德品)
- (3) 面貌円満、眉高而長。(隨喜功德品)

(1)では文頭で「示人百歳子」が掲示され、その状態が「髮白」「面皴」の連結によって表現されている。両成分は並列の関係にあり、それぞれ〔名詞+形容詞〕の形式によって構成されている。

(2)では「有深心者」の状態が複合語「清淨」「質直」の連結によって表現されている。仏典に於けるこのような複合語の使用について、朱慶之1992は発生原因となる時代的背景を指摘し、仏典翻訳が中古漢語の発展に与えた影響として複合語の普及を挙げている⁹⁾。

(3)では「眉」の状態が「高」「長」の連結によって表現されている。何れの場合も文頭で掲示された語の状態に関し、二種類の形容詞句の連結によって表現され、関係詞には「而」が用いられている。

2.2. 動詞句の連結

黎錦熙1992は「文言中での接続詞『而』の用法は非常に多く、多くのものは動詞の連結である」と指摘している。動詞句によって表された並列成分の連結例を次に挙げる。

- (4) 便捨楽土、宮殿臣妾、剃除鬚髮、而被法服。(序品)
- (5) 爾時無數、千万億種衆生、来至仏所、而聽法。(藥草喻品)
- (6) 擊于大法鼓、而吹大法螺。(化城喻品)
- (7) 於後親友、会遇見之、而作是言。(五百弟子受記品)
- (8) 知一切世間、天人阿脩羅等、心之所疑、而白仏言。(見宝塔品)
- (9) 誰為其說法、教化而成就。(從地涌出品)

(10) 為一切衆生、歡喜而愛敬。(法師功德品)

(4)では「鬚髮」に対する「剃除」と「法服」に対する「被」が当事者の行動内容に当たり、(5)では「仏所」に対する「来至」と「法」に対する「聴」が「千万億種大衆生」の行動内容に当たる。(6)では楽器の操作が「大法鼓」に対する「撃」と「大法螺」に対する「吹」の連結によって表現され、何れの場合にも動詞句の並列関係が構成されている。

(7)では「而」後部の成分が「作是言」とあり、「而作是言」の表現が構成されている。ここに見られる「而作是言」は全文中17箇所、また、(8)に用いられている「而白仏言」も9箇所の使用が確認され、それぞれ定形句として多用されていたと考えられる。

(9)(10)では「教化」「成就」、「歡喜」「愛敬」の連結が構成され、ここにも(2)と同じく複合語の使用が確認される。

3 逆接

楊伯峻1981は、「而」によって連結される二つの述語には動作の連結もあるが、相反した内容のものが連結されることもある、と述べている。後者の用法は逆接を意味している。本章では、逆接を示す「而」について、単独使用された場合と〈仮設〉を示す「雖」との連動によって使用された場合の例を挙げ、機能について述べる。

3.1. 「而」単独使用

「而」が単独使用によって逆接を示した例を次に挙げる。

- (11) 無問而自説、称歎所行道。(方便品)
- (12) 爾時心自謂、得至於滅度、而今乃自覚、非是実滅度。(譬喩品)
- (13) 父母念子、与子離別、五十余年、而未曾向人、説如此事。(信解品)
- (14) 欲以威勢、降伏諸国、而諸小王、不順其命。(安樂行品)
- (15) 清浄好歌声、聴之而不著。(法師功德品)

(11)では「而」前部で条件「無問」が揭示され、それに反する行為として後部に「自説」が示されている。(12)では相反の関係にある「心自謂、得至於滅度」「今乃自覚、非是実滅度」各成分の前部にそれぞれ「爾時」「今」とあり、時間的條件の違いが明確にされている。

(13)(14)(15)では何れも「而」前部で条件が揭示され、後部の成分ではそれが実行されていない状態が示されている。

3.2. 「雖」使用による〈讓歩〉の表現

楚永安1986は、「雖」が文の前部に用いられて既成事実を承認し、後部に置かれた「而」「然」等との連動によって対立関係を表示することを指摘している。このように逆接を示す「而」に

は、〈仮設〉を示す「雖」との連動によって〈譲歩〉を表現する作用がある。「雖」と「而」との連動が見られる例を次に挙げる。

- (16) 父雖憐愍、善言誘諭、而諸子等、樂著嬉戲。(譬喩品)
- (17) 雖有力無所畏、而不用之。(〃)
- (18) 雖一地所生、一雨所潤、而諸草木、各有差別。(藥草喩品)
- (19) 令顛倒衆生、雖近而不見。(如來壽量品)
- (20) 雖未得、無漏智慧、而其意根、清淨如此。(法師功德品)

(16)では「父」の態度「善言誘諭」、「諸子等」の態度「樂著嬉戲」という相反する意を含む両成分の連結、(17)では条件「有力無所畏」と対する結論「不用」との連結に「而」が用いられ、「雖」との連動によって〈譲歩〉が表現されている。(18)では条件「一地……、一雨……」と結果「諸草木、各有差別」が「雖」と「而」によって連結され、前部「一地」「一雨」と後部「各有差別」に生じた不調和の関係が強調されている。

王力1962は、逆接を示す「而」の機能について「接続した二つの成分が相反、または不調和の関係にある場合に用いられ、両者の意味に転換が生じるもの」と定義しており、(16)(18)の例文中に見られる連結にこの「相反」「不調和」の関係が認められる。

(19)では条件「近」とそれに対する結果「不見」、(20)では条件「未得、無漏智慧」とそれに対する結果「其意根、清淨如此」が連結され、何れの場合も〈仮設〉を示す「雖」との連動によって〈譲歩〉が表現されている。

4 「而復」使用による表現

接続詞「而」には「復」を後続させて両成分を連結させる用法もある。「而」「復」の結合が見られる例を次に挙げる。

- (21) 是舍唯一門、而復狹小。(譬喩品)
- (22) 其宅久故、而復頓弊。(〃)
- (23) 我等疲極、而復怖畏。(化城喩品)
- (24) 或現大身、滿虛空中、而復現小、小復現大、於空中滅。(妙莊嚴王本事品)

(21)では「是舍」の様子が「唯一門」「狹小」の連結によって表現されている。同様に(22)では「其宅」の様子が「久故」(古い)「頓弊」(破れる)、(23)では「我等」の状態が「疲極」「怖畏」の連結によって表現されている。

三例に用いられた「復」は、「而」と共に接続詞として機能するような印象を与えるが、楊伯峻1981は文言文に於ける「復」を副詞であると主張している。また、「復」は二つの述語を連結させる作用を有し、その点は接続詞にも似ているが、実際には副詞としてのみ機能する、とも述べられている。この説に従えば、(21)(22)(23)に用いられた二つの形容詞句は〔接続詞

「而」＋副詞「復」によって連結されたと解釈される。

(24)では、「淨藏」「淨眼」二人の王子が奇跡を行う場面が描写され、その模様が「現大身、満虚空中」「現小、小復現大、於空中滅」の連結によって表現されている。ここでは動詞句である両成分を連結させた関係詞に「復」も含まれ、上の三例と共に「復」の副詞としての機能が発揮されている。

5 手段、理由・原因の表現

呂叔湘1942は、文言文の中で「原因」を示す部分である〈原因補詞〉は通常、主語と動詞の間に置かれ、〈原因補詞〉と動詞との間には時として「而」が用いられることがある、と述べている。また、「原因」の種類に①事実の原因②行為の理由③推論の理由が含まれることも指摘している。本章では「而」に具えられた手段、理由、原因を示す機能について、「而」の単独使用、他の語との連動による使用の例を挙げて述べる。

5.1 「而」単独使用

5.1.1 手段

「而」の単独使用によって両成分が連結され、前部に手段の意が含まれた例を次に挙げる。

- (25) 如斯之等類、云何而可度。(方便品)
- (26) 今聞仏音声、隨宜而説法。(譬喩品)
- (27) 今法王大宝、自然而至。(信解品)
- (28) 若有難問、隨義而答。(安樂行品)
- (29) 以舍利起塔、七宝而莊嚴。(分別功德品)

(25)では〔動詞「云」＋疑問代名詞「何」〕と〔助動詞（可能を示す）「可」＋動詞「度」(悟りを得させる)〕が「而」によって連結され、可能の是非を問う形が構成されている。

(26)では「隨宜」「説法」、(27)では「自然」「至」が連結され、何れの場合も「而」の前部は行為の手段、後部は内容を示している。それぞれの「而」前部の成分は品詞の構造が異なり、(26)の場合は〔動詞＋形容詞〕、(27)の場合は〔名詞〕となっている。しかし、後部の成分が行為の内容に当たる点は共通している。

(28)では文頭で「若」を用いて条件「有難問」が揭示され、それに対する命令が行為の手段「隨義」と内容「答」の連結によって表現されている。(29)では「舍利」を用いて建てられた塔の裝飾が手段「七宝」と結果「莊嚴」の連結によって表現されている。

5.1.2 理由・原因・結果

「而」前部または後部の内容が「理由・原因・結果」を表現する例について、「理由+行為」「理由+結果」「行為+結果」に分類し次に挙げる。

○理由+行為

- (30) 我見彼土、恆沙菩薩、種種因緣、而求仏道。(序品)
 (31) 是人於何、而得解脱。(譬喩品)
 (32) 爾時長者、將欲誘引其子、而設方便、密遣二人、形色憔悴、無威徳者。(信解品)
 (33) 是事何因緣、而現如此相。(化城喩品)

(30)では「恆沙菩薩」の行為が理由を示す「種種因緣」と内容を示す「求仏道」の連結によって表現されている。(31)では行為の理由を示す部分が〔前置詞「於」+疑問代名詞「何」〕によって表現され、内容を示す「得解脱」との連結によって疑問の形式が構成されている。

(32)では〔副詞「將」+動詞「欲」〕に「誘引其子」を後続させて「長者」の希望が揭示され、「而」後部の「密遣二人」によって行為の内容が表現されている。(33)では(31)と同様に疑問の形式が用いられ、理由「何因緣」と結果「現如此相」が連結されている。

○理由+結果

- (34) 我等亦得此法、到於涅槃、而今不知、是義所趣。(方便品)
 (35) 是諸衆生、未免生老病死、憂悲苦惱、而為三界、火宅所燒。(譬喩品)

(34)では理由「得此法、到於涅槃」と結果「今不知、是義所趣」が「而」によって連結されている。(35)では〔副詞「未」+動詞「免」〕によって「生老病死、憂悲苦惱」からまだ脱却していない状態が表現され、後部にその結果が示されている。

○行為+結果

- (36) 如何欲退還、而失大珍寶。(化城喩品)
 (37) 是菩薩、住何三昧、而能如是、在所變現、度脱衆生。(妙音菩薩品)
 (38) 発阿耨多羅三藐三菩提意、而能作是、神通之願。(普賢菩薩勸発品)

(36)では〔動詞「如」+疑問代名詞「何」〕によって反語形が構成され、「欲」の内容が行為「退還」と結果「失大珍寶」の連結によって表現されている。(37)でも疑問代名詞「何」が用いられて「三昧」の内容を問う形式が構成され、「而」後部の可能を示す動詞「能」以下に結果が示されている。(38)では「而」前部に行為の内容が示され、後部の動詞「能」以下に可能となる結果の内容が示されている。

5.2. 連動による表現

呂叔湘1942は、文言文で「原因」を示す関係詞として「以」「為」「由」を挙げ、関係詞は「原因」の内容を示す〈原因補詞〉を引き入れることができる、と記している。このように接続詞「而」は他の語(関係詞)との連動によって手段、原因等を表現する機能も具えられ、これについては、周法高1961も「以」「為」等との連動による表現形式を紹介している。本章では他の語と「而」との連動による使用の例を挙げ、機能について述べる。

○「以～而～」

- (39) 以何因縁、而有此瑞。(序品)
- (40) 或以指爪甲、而画作仏像。(方便品)
- (41) 即以天華、而散仏上。(化城喻品)
- (42) 以天宝衣、而自纏身己。(藥王菩薩本事品)

(39)では〔疑問代名詞「何」+名詞「因縁」〕の前に前置詞「以」が置かれて「而」と連動し、結果「有此瑞」との連結によって原因を問う形式が構成されている。(40)では「指爪甲」「画作仏像」、(41)では「天華」「散仏上」、(42)では「天宝衣」「自纏身己」が行為についての用具と内容に当たり、両成分の関係が「以」「而」の連動によって表現されている。

○「以～而以～」

- (43) 以諸菩薩、種種讚法、而以讚歎。(從地涌出品)

(43)は上記の形式「以～而～」に更に一箇所「以」が加えられた例である。ここでは行為についての用具「諸菩薩、種種讚法」と内容「讚歎」が連結され、「以」は両成分の前に置かれている。複数の「以」の存在は解釈に混乱を与えることもあるが、「而」前部に置かれた「以」は手段を示す前置詞、後部に置かれた「以」は目的と結果を示す接続詞であり、両者の機能は明らかに異なっている。

○「～而以～」

- (44) 所説無所畏、能令衆歡喜、未曾有疲倦、而以助仏事。(五百弟子受記品)
- (45) 即解頸、衆宝珠瓔珞、価値百千両金、而以与之。(觀世音菩薩普門品)

これは「而」後部にのみ「以」が後続した例である。(44)では行為の条件「未曾有疲倦」と内容「助仏事」が「而以」によって連結され、「所説無所畏、能令衆歡喜」の様子が詳しく表現されている。(45)では「而以」前部で行為の内容が「解頸、衆宝珠瓔珞、価値百千両金」と掲示された後、それを発端とする次の行為の内容が「而以」によって連結されている。

○「為～而～」

- (46) 常為大乘、而作因緣。(藥草喻品)
 (47) 常為諸仏、而作長子、猶如今也。(授学・無学人記品)
 (48) 亦為此仏、而作長子。(〃)
 (49) 即為其父、而説偈言。(藥王菩薩本事品)
 (50) 此久滅度、多宝如来、当為汝、而現其相。(妙音菩薩品)

(46)では〔前置詞「為」+名詞「大乘」〕によって目的が示され、「而」以下の部分ではそれに対する行為「作因緣」が示されている。同様の形式により、(47)では「諸仏」、(48)では「此仏」と「為」との結合によって行為の目的が構成され、「而」によって内容「作長子」と連結されている。

(49)では「其父」「説偈言」が「為」「而」によって連結され、行為の目的と内容が表現されている。他の箇所にも「為～而説偈言」の形式は用いられ、全文中5箇所確認される。

(50)では強制を示す助動詞「当」が用いられている。ここでは、前置詞「為」が行為の対象「汝」の前に置かれ、内容「現其相」との連結によって命令の形式が構成されている。

○「～而為～」

- (51) 今仏教化、成就菩薩、而為開示。(法師品)
 (52) 又菩薩摩訶薩、不応於女人身、取能生欲想相、而為説法。(安樂行品)
 (53) 自見其身、而為説法。(〃)
 (54) 觀世音菩薩、即現仏身、而為説法。(觀世音菩薩普門品)

(51)では「而」「為」が結合し、「仏」による行為が理由「教化、成就菩薩」と内容「開示」の連結によって表現されている。

(52)では行為の手段「生欲想相」、(53)では行為の原因「自見其身」が「而為」によって内容「説法」と連結されている。この「而為説法」は全文中に多く見られ、25箇所確認される。

(54)では「觀世音菩薩」の行為が「即」以下の部分で「現仏身」「説法」の連結によって表現されている。この「即現～身、而為説法」形式は全文中に17箇所確認され、梵王、長者、婆羅門等が名詞の部分に入る。

○「為～而為～」

- (55) 為無量無辺、菩薩大衆、恭敬困遶、而為説法。(妙音菩薩品)

(55)は接続詞「而」を用いた文中に「為」が二度使用された例であり、この「為」の機能は「以～而以～」に用いられた「以」と類似している。前部の「為」は行為の手段「無量無辺、菩薩大衆、恭敬困遶」の前に置かれてこれを揭示し、後部の「為」は「而」との結合により行為の内容「説法」を示している。

○「為～故而～」

(56) 我為聽是經故、而來至此。(見宝塔品)

(57) 諸天晝夜、常為法故、而衛護之。(安樂行品)

(56)は前置詞「為」と接続詞「而」が連動した文中に「故」が加えられた例であり、行為の目的「聽是經」と内容「來至此」が連結されている。(57)では名詞「法」が「為」「故」によって行為の理由であることが明示され、「而」以下に内容「衛護之」が連結されている。(56)「此」は「耆闍崛山」、(57)「之」は「有成就、此第四法者」を示し、指示対象に当たる語は共に先行詞として既に表示されている⁽³⁾。

○「～故而～」

(58) 哀愍我等故、而賜仏音声。(授記品)

(58)は「而」前部に「故」のみが加えられた例であり、理由「哀愍我等」と内容「賜仏音声」が「故而」によって連結されている。

○「以～故而～」

(59) 以不受、一切法故、而於諸漏、心得解脫。(化城喻品)

(59)は行為の理由を示す成分の前に前置詞「以」が置かれ、「故而」以下の部分で内容が示された例である。ここでは行為の理由「不受、一切法」が「以」「故」によって明示され、「而」後部では行為の内容「於諸漏、心得解脫」が示されている。

6. 場所+行為

周法高1961は、接続詞「而」の用法の一つとして前置詞「從」(「由」、「自」)との連動による表現を記している。この形式を用いた文では、前置詞が場所を示す語の前に置かれて行為が生じる位置が明確にされ、「而」以下の部分で内容が示される。本章では、前置詞「於」「從」「在」と「而」の連動による場所と行為の表現について述べる。

○「於～而～」

(60) 昔於某城、而失是子、周行求索、遂來至此。(信解品)

(61) 於大衆中、而唱是言。(藥草喻品)

(62) 於清淨地、而施牀座。(安樂行品)

(63) 即於仏前、而說呪言。(陀羅尼品)

(60)では場所を表す名詞「某城」の前に前置詞「於」が置かれ、「而」以下の部分で行為の

内容が表現されている。(61)では行為の場所が方向詞「中」の追加によって範囲が更に限定され、「而」後部の成分で行為の内容が表現されている。

(62)では「清浄地」「施牀座」、(63)では「仏前」「説呪言」の連結に同じ作用が見られる。(63)の「即於仏前、而説呪言」は全文中3箇所の使用が確認され、一語のみ異なる「即於仏前、而説呪曰」が1箇所確認される。

○「從～而～」

(64) 從座而起、恭敬合掌。(見宝塔品)

(65) 如蓮華在水、從地而涌法。(從地涌出品)

(64)は前置詞に「從」が用いられ、行為の起点となる場所が示される例である。ここでは「從」後部の「座」が起点となる場所に当たり、「而」後部の「起」が行為の内容に当たる。この「從座而起」は全文中4箇所確認される。

(65)では「地」が起点となる場所、「涌法」が行為の内容に当たり、両成分は「從」「而」の連動によって表現されている。

○「在～而～」

(66) 在菩提樹下、而處師子座。(安樂行品)

(67) 即皆見我身、在此而説法。(如來壽量品)

(68) 在中而娛樂、聞香悉能知。(法師功德品)

(66)は前置詞に「在」が用いられ、行為が進行中の場所が示される例である。場所を示す語として(66)では〔名詞「菩提樹」＋方向詞「下」〕、(67)では指示代名詞「此」、(68)では方向詞「中」が「在」後部に置かれ、「而」以下の部分で行為の内容が表現されている。

7. おわりに

以上述べたように、羅什訳『法華經』文中に用いられる接続詞「而」の表示内容には、前後部に置かれた両成分の並列、逆接、因果関係等が含まれている。その表現には「而」の単独使用だけでなく、副詞の後続や前置詞との連動による形式も用いられている。また、連結された成分となる部分を品詞別に見れば、(3)「高」「長」等の形容詞、(27)「至」(28)「答」等の動詞が用いられ、〔名詞＋形容詞〕〔動詞＋名詞〕等の形式の使用も確認される。

但し、成分は全てが異なった表現になるとは限らず、「而作是言」「而白仏言」等は定形句として文中で何度も使用されている。「而」に「為」が後続した「而為説法」にも同じ作用が見られ、「即現～身、而為説法」は名詞「～」の部分が入れ替わり、繰り返し使用されている。

この他、成分の中には複合語が用いられた例もあり、(29)には「七宝」「莊嚴」が使用され

ている。また、(2)「清浄」(9)「成就」(10)「歎喜」等は、後世に於いても漢語の一般的な語彙として定着し、ここに仏典翻訳が漢語の発展に与えた影響の一部を見ることができる。

本論では、並列の表示、逆接の表示、手段や原因等の表示、場所の表示での接続詞「而」の応用例を挙げ、表現形式の構成について解説した。

〈註釈〉

- (1)参考とした『法華経』テキストについては、前稿「指示詞について」にて説明済み。
- (2)朱慶之1992は、複合語普及(漢語では「双音化」と表現)の時代的背景として次の状況を挙げている。魏晋南北朝期に入った中国では、それまでの学術思想に見られた儒教独占の傾向が打破され、仏学、道教等、多くの研究が活発化した。こうして始まった新しい概念の増加に言語の上で対応するためには、単音語が主流では困難であることから、漢語の双音化が進められた。仏典の文中では梵語の訳語に様々な複合語が当てられるようになり、それが中古漢語の語彙に複合語が含まれる要因となった。
- (3)二つの例文中、接続詞「而」後部に置かれた指示代名詞「此」「之」には先行詞の意を引き継ぎ文を構成する補足作用が具えられている。近称指示詞「之」の補足作用については、前稿「指示詞について」にて説明済み。

〈文献目録〉

- 牛島徳次1967、『漢語文法論(古代編)』。大修館書店(1967.1)。
- 王力1962、『古代漢語』第二冊。北京：中華書局(1962.11)。
- 朱慶之1992、「試論仏典翻訳対中古漢語詞匯発展的若干影響」、『中国語文』1992年第4期、297—305頁。
- 朱徳熙1982、『語法講義』。北京：商務印書館(1982.9)。
- 周法高1961、『中国古代語法(造句編)』。台北：中央研究院歴史語言研究所。(1961.4)。
- 薛鳳生1991、「試論連詞『而』字的語意与語法機能」、『語言研究』1991年第1期、55—62頁。
- 楚永安1986、『文言復式虚詞』。中国人民大学出版社(1986.5)。
- 楊伯峻1981、『古代語虚詞』。北京：中華書局。
- 呂叔湘1942、『中国文法要略』。北京：商務印書館(1942.4)。
- 黎錦熙1992、『新著国語文法』。北京：商務印書館(1992.9)。

【キーワード】

連結 連動 並列 逆接 関係詞